

宵

花吹雪を満月の水盃ひとひらに一枚落とし

宴うたげの衣くれなゐの紅しずくに琴糸が滴をこぼし

秘曲の絹は眠れる女にゆるりと

被せられぬ、築地ついでに囲まれし館やかたの中うち

青銅の鏡かけらの破片が散らばり

華奢な手よりすべり落ちて割れし音の

余韻が耳の奥うちに潜む、静寂うちの沈む中

今、再び現うつつへと目は開かれぬ

うら寂し、枕もとの下に隠されたものは

塵の世に生きる者をして「嘘」と言わしむ

雲間より散りばめられた言葉

銀の裏地の在るも信じ難きなり

返歌を詠む才覚の無くして

如何にしてこの辛き心や伝えむ

怖れおののくうちに時の河のみ流れ

救いのみを虚しくも待ち侘ぶる

(1984.4.22)